

8. 面談記録等

面談記録

日付 : 2001年9月18日

議題 : SICA との意見交換

参加者 : 石塚競所長、松井恒企画調査員、中川淳専門家、山形洋一団長、清水一良団員、高橋政行団員、阪本真由美団員

面談者 : SICA Dr.Luis Alvaro Verasquez、Oscar Toledo 大場三穂専門家

議事内容 :

- 1 山形団長より調査団の目的、現在の状況説明
- 2 SICA の Dr.Verasquez より、シャーガス病の重要性を認識しており、ベリーズもしくはニカラグアで開催される SICA の次期閣僚会議、及びそれに先立つ技術会合にて、シャーガス病に取り組む事を提案する。
- 3 SICA の Toledo より、シャーガス病はグ国と国境を接するホンデュラス、ニカラグア、エル・サルでも取り組むべき地域としての問題との認識。また、シャーガス病は感染症のひとつであり、シャーガス病対策にて蓄積した経験を将来的に他の感染症に応用したい。
- 4 大場専門家より SICA 社会統合総局では人的資源開発を中心課題に据えており、住居の改善、感染症対策、環境問題、職業訓練（職業訓練校、以下 INCAP）に取り組んでいる。これらにシャーガス病を加える。現在実施中の INCAP に対する支援教育や教育審議会を通して人材育成に関するキャンペーンの実施が可能であろう。
- 5 シャーガス病対策における OPS の積極的な参加が必要であり、SICA からも専門家派遣を依頼予定。また、社会開発面においては日本からの SICA に対する専門家の派遣を希望する。係る専門家は中米の社会問題を明確にしつつ、プロジェクトの企画調整を業務とする。
- 6 山形団長より、同プロジェクトにおいては人材育成が重要と捉えている。プロジェクト監視は住民参加型の昆虫監視に委託する。国境を接する問題であることから、中米各国の相互コミュニケーションが必要である。

日付 : 2001年9月18日

訪問機関 : 在グアテマラ日本大使館

参加者 : 石塚競所長、松井企画調査員、中川淳専門家、Dr.Luis Alvaro Verasquez (SICA)、Oscar Toledo (SICA)、大場三穂専門家 (SICA)、山形洋一団長、清水一良団員、高橋政行団員、阪本真由美団員

面談者 : 上野景文大使、石井一等書記官

議事内容 :

- 1 山形団長より、プロジェクトの概要説明。第1フェーズでは地方分権化への対応が課題であった。中央と地方との連携については、ジェネラリストな人材を専門家とし、地方にJOCVを配置、互いの連携を図った。また、国際パートナーシップの面においては、デル・バリェ大学在籍のCBCの人材を起用。プロジェクトに対するPAHOの認知を確認。住民参加が重要な要素であり、学校における衛生教育面で、教育分野のJOCVとの連携の結果、分野を超えた連携ができています。
- 2 大使より、グ国側の同プロジェクトに対する取り組みについて照会。派遣中専門家のC/Pは3名おり、C/Pが現場で指導し、専門家は後方支援のみ。各保健管区のJOCVのC/Pも同様である。財政面において、厚生省は散布作業員68名をシャーガス病専属に雇用。殺虫剤はJICAと同等の金額が厚生省の予算である。
- 3 グ国側からのプロジェクトに対する理解に関し、シャーガス病対策はグ国側から提示されたプロジェクトであり、同プロジェクトに日本人が関与することによる効果は大きい。グ国政府は成果が目に見えることから、積極的に取り組んでいる。PAHOに対しても積極的にアプローチをしており、2002年2月に国際評価調査団がグ国を訪問予定。地方分権化により、保健管区によりプロジェクト実施能力が異なるものの、もともとグ国には、マラリア撲滅局があったことから、プロジェクトの基盤が整っていたといえる。
- 4 大使より、第2フェーズが開始するための前提条件は整っていると思われる。個々に実施中のプロジェクトを梃に将来的に中米統合レベルにつなげてほしい。また、日本・中米フォーラムが日本で開催されるが、同プロジェクトをアジェンダに含め中米レベルでアピールするイニシアティブが必要と考えている。

日付 : 2001年9月18日

議題 : 厚生省における協議

場所 : 厚生省国立生物センター講堂

参加者 : 厚生省 Dr.Julio Molina Avilez(副大臣)、 Dr.Hugo Alvarez (企画部)
Dr.Danilo Rodriguez (人事対策局長)、 Cesar Busutamante
Arauz (国際協力局顧問)、 Juilo Cesar Argueta Reyes、 Jaime
Abraham Juarez (ベクター昆虫局) Julio Castro (ベクター昆
虫局国内調整員)、 Dr. Genard Mendez Guzman (フティアパ
保健管区長)、 Gustamo Martinez Palma (SIAS) 中川淳専門
家

大統領府企画庁 Leticia Ramirez、 Liliana de Espana、 Juan
Antonio Flores、 布施和博専門家

SICA Dr.Luis Alvaro Verasquez、 Oscar Toledo 大場三穂専門家
石塚競所長、松井恒企画調査員、山形洋一団長、清水一良団員、高橋
政行団員、阪本真由美団員

議事内容

- 1 厚生省より、積極的にプロジェクトに取り組んでおり、今回の薬剤に係る問題にもできる限りの対応している。現在5保健管区においてプロジェクトを実施中。新たにキチェ保健管区にて開始予定。チキムラ保健管区に早急なJOCV派遣を望む。
- 2 厚生省副大臣より、日本の支援に感謝すると同時に今後のプロジェクトの進展を期待する。
- 3 SICAより、同プロジェクトを積極的に支援しつつ、中米地域として同プロジェクトに取り組みたいと考えている。プロジェクトの広域化に対する支援、INCAPを通じた支援、政治・技術レベルでの支援、様々な支援機関との調整が可能である。
- 4 同プロジェクトに関する厚生省側のプレゼンテーション。シャーガス病対策プロジェクトの実施に伴う成果として以下の事が挙げられる。国境なき医師団から200回噴霧分の薬剤の供与。ホンデュラスにおける研究協力。同分野において著名な Carlos Ponce 医師のグ国訪問。ニカラグアから調査依頼がある、エル・サルについてはT.d.種のみが生息との情報があることから追跡調査の必要あり。JICAの支援によりメキシコ人昆虫学者が2名専門家として同プロジェクトに参加。
- 5 高橋団員より、調査目的の説明
- 6 厚生省によるシャーガス病対策のプレゼンテーション。8月にパナマで開催されたOPS会議においてグ国の要請の結果、2002年2月にPAHOによる対グ国シャーガス病評価ミッションの派遣が決定。また、3月にはエル・サルにおいて中米レベルでの取り組みに関する会議が実施予定。
- 7 グ国は他国と比較し薬剤購入コストが高いことから、購入コストとを下げするために積極的なOPSの介入が必要。また、国内機関間の取り組みを統一するため、「シャーガス病コミッション」の設置が必要。
- 8 団長より、薬剤噴霧に係るサイクル説明。今後シャーガス病対策にはコミュニ

ティーによる監視が必要であり、そのために国内の「地域保健統合システム (SIAS)」の早期確立が重要。また、2002年2月の PAHO の評価調査団訪問に先駆け実績を構築する必要がある。第2フェーズは対象地域が大きくなると同時に対象となるTD種の撲滅がより困難であることからグ国の取り組み姿勢が重視される。

- 9 高橋団員より、プロジェクトの第2フェーズ開始にあたっては広域化を念頭に、専門家のチーム派遣についても検討する余地がある。また、それにあたっては経済企画庁を含めグ国サイドの積極的関与が必要である。
- 10 厚生省より、同プロジェクトは研究を中心課題としているのではなく、1991年から7年間実施された「熱帯病対策プロジェクト」の研究成果を実施している。シャーガス病は撲滅可能な5大ベクター感染症のうちの一つであり、対応が迫られているが、貧しい住民に蔓延しているため対策がとられていないのが現状である。

日付 : 2001年9月19日
議題 : JOCV との意見交換
場所 : JICA 事務所
参加者 : 石塚競所長、丸橋奈津子 JOCV 調整員、中川淳専門家、大場三穂専門
家、山形洋一団長、清水一良団員、高橋政行団員、阪本真由美団員
面談者 : 野並丈朗隊員 (11/3 ・ マラリア風土病対策)、今井悟隊員 (11/3 ・
マラリア風土病対策)

議事内容

- 1 団長より、第二フェーズでは、すでに開始しているプロジェクトとの調整をどうするのか、広域化の問題も含めて検討予定。今後の活動方針を考えるにあたり、現場の保健管区での活動がどのようなものなのか。
- 2 今井悟隊員 サンタ・ロサ、T.d.の生息地にて活動。昨年6月赴任散布予定家屋3分の1終了。啓蒙活動を実施。年内に啓蒙活動をうまく軌道にのせ、監督作業に徹することができることよい。人事異動が頻繁にあり、現在のC/Pは3人め。交替の都度引継ぎが大変。カウンターパート交代の問題については、厚生省からの働きかけにより改善しつつある。
- 3 野並隊員 サカパ、R.p.の生息地にて活動。昨年6月から順調に散布が開始。年末から年始にかけてサシガメがどれくらい減ったか調査。2回目の散布はすでに開始。散布対象家屋が少ないことから、活動終了前に追跡調査を実施の予定。啓蒙活動があまり実施されていないことから、保険センター (Centro de Salud) の医師を集め啓蒙活動。そのための視聴調査 (ラジオを中心に) 実施。
- 4 地方分権化という問題がみられるなか JOCV の存在によってプロジェクトがうまくいっている面がある。シャーガス病対策に関する知識は、OJT での習得が中心だったが、気を付けた点は。
野並隊員：プロジェクト対象範囲が県全体であり、当初自分が想定していたコミュニティ開発と違っていた。仕事を開始するに従い、作業員に対する説明の仕方、効率的に作業員を利用し作業を進めることの重要性に気がついた。
今井隊員：紙を使う、作業員との連絡を蜜にすること。
- 5 保健管区や C/P により取り組み状況は異なる。今井隊員の場合薬剤散布が業務の7割を占めるが、野並隊員の場合薬剤散布には配属先が殆ど実施。これらの相違が各保健管区の成果の違いになっている。
- 4 今井隊員より、第2フェーズが開始後の第1フェーズ実施サイトに対するフォローについて照会。団長より、殺虫剤は、第2フェーズの予算を利用し確保予定。第2フェーズ開始時にはベクター種が減少していると想定されるが、散布済み地区に対するフォローに加え、新たに4地区加わることにより作業量は増えるものと思われる。第1フェーズ対象地区に対してフォローのための JOCV シニア隊員派遣を検討中。

日付 : 2001年9月19日

議題 : 厚生省及び SEGEPLAN との協議

場所 : 厚生省

参加者 : 厚生省 Dr.Hugo Alvarez (企画部) Dr.Danilo Rodriguez (人事対策局長)、Cesar Busutamante Arauz (国際協力局顧問)、Juilo Cesar Argueta Reyes、Jaime Abraham Juarez (ベクター昆虫局) Julio Castro (ベクター昆虫局国内調整員)、Luis Arturo Marroquin 中川淳専門家

大統領府企画庁 Leticia Ramirez、布施和博専門家

SICA Oscar Toledo、大場三穂専門家、山形洋一団長、

清水一良団員、高橋政行団員、阪本真由美団員

議事内容

- 1 高橋団員より、第2フェーズの開始にあたっては広域化を含めどこまで SICA の支援が得られるのか。専門家のチーム派遣については、広域化とし専門家間のコーディネートによる効果が高いと思われる。
- 2 厚生省より、第2段階でRD種が殆どいなくなるとはいえ、薬剤散布は必要。8月にパナマで実施された OPS の会議にて、OPS による薬剤購入の話があったが、シャーガスだけでなく全てのベクターが対象となる可能性がある。第2フェーズでの支援対象地区であるキチェ保健管区については、車両購入の必要性がある。
- 3 第2フェーズでは、プロジェクトに住民を含めるよう考えてるべきである。プロジェクトの持続性は重要であり、そのためにはキャパシティー・ビルディングが不可欠。
- 4 過去にオンコセルカ対応したときの経験から、552 のコミュニティーに薬剤を散布するにあたっては、コミュニティーあたり1名の人員育成でも対応は可能。マラリア対策時のボランティア網は重要である。マラリア対策においては、ボランティアに対し過大な業務が課せられたことが失敗の原因か。
- 5 コミュニティーによる監視システムについては、教員に対する研修を行い、教員が授業に取り込み、子供をとおしベクター監視が可能。現在教育省が実施している「健康な学校 (escuela saludable) プログラム」の中にはベクター感染対策がカリキュラムの一つとして含まれている。ただし、教員はコミュニティーに根付いておらず、かつ、11月~2月まで学校が休暇の間不在となるという問題がある。
- 6 厚生省は現在、SIAS を推進しているが機能しているとはいえない。いくつかのコミュニティーにおいては、SIAS が NGO と連携して普及活動を進めており、係る連携は重要。ただし、NGO との契約は各保健管区の契約となるため、保健管区長のイニシアティブが重要。
- 7 住民参加型昆虫監視システム確立が今後のプロジェクト持続性の鍵であり、そのためには社会面開発面からのプロジェクトアプローチを進める必要があるが、現在の対策局にはそれに該当する人材がない。その意味で過去にオンコセルカ症対策に貢献した Pedro Antonio Molinas の雇用を現在厚生省に申し入れている状況。

日付 : 2001年9月19日
訪問機関 : 厚生省
参加者 : 石塚競所長、松井企画調査員、中川淳専門家、Oscar Toledo (SICA)、
大場三穂専門家 (SICA)、山形洋一団長、清水一良団員、
高橋政行団員、阪本真由美団員
面談者 : Mario Boranos (大臣) Julio Molina Avilez (副大臣)

議事内容

- 1 大臣より、日本の支援に対し感謝している。同プロジェクトによる成果が着実であることを嬉しく感じている。今後も同プロジェクトに対し厚生省としてできる限りの支援をしていきたい。
- 2 団長より、プロジェクトの経緯説明。今後のプロジェクト持続には、住民参加型昆虫監視体制の確立が重要となることから、SIAS 体制の強化は必要不可欠である。また、キチエ県から薬剤散布に係る車輛確保の問題が出ていることから、何とかならないものか。
- 3 副大臣より、SIAS 体制の強化を含め今後もプロジェクトを強化していきたい。また、シャーガス病対策時に利用した GIS についても、他の情報リソースを含める形で今後も活用していきたいと考えている。
- 4 SICA より、シャーガス病対策については、中米地域における問題として取り組む必要があると考えている。次期中米機構閣僚審議会で本件におけるグアテマラのイニシアティブを示す必要がある。
- 5 大臣より、同プロジェクトを積極的に支援していきたいと考えている。キチエ県における車輛確保の問題及び SICA 閣僚審議会についても前向きに対応したい。

日付 : 2001年9月20日

訪問機関 : フティアパ保健管区視察

参加者 : 大統領府企画庁 Lic.Maria Antonicta de Lourdes Quinteros (課長)、
布和博専門家

SICA Oscar Toledo、大場光男専門家

厚生省 Lic.Cesar Bustamante Dr.Julio Cesar Castro Ramirez,

Dr.Jaime Juarez, Dr.Luis Marroquin 中川淳専門家

松井恒企画調査員、山形洋一団長、清水一良団員、高橋正行団員、

阪本真由美団員

面談者 : Dr Genard Antonio Menendez Guzman(Director de Area de Salud)

Hugo Solorzano Barrios (フティアパ教育省県事務所長)

Col. Torres Coronado (フティアパ第10軍部管区) Ranferly

Trampe

Fuentes (JOCV の C/P) 橋本謙隊員 (11/3・マラリア風土病対策)

小島路生隊員 (11/2・プログラムオフィサー)

1 厚生省フティアパ事務所訪問

- (1) 保健管区側による現状説明。フティアパには、2種類のベクターが生息しており、感染が厳しい状況。県中心部では6割近くの地域にベクター感染が認められた。60%近い地域に薬剤を散布。散布後の評価もかなり高い効果を示している。シャーガス病の知識を、教員を通し深めていくための教員研修を実施している。ベクターの監視には、住民参加型監視システムの構築が必要であり、その意味でも教員養成の重要性を強調していく。
- (2) 厚生省より、現在の感染者データを得ると同時に、薬剤噴霧等を通しどれくらいの人々が救われたのか具体的データが重要。ベクター監視システム確立にあたっては、セクター間の相互作用を重視したのが成功に至った要因か。
- (3) Dr.Julio Argueta (厚生省) より、数ヶ月前には調査不足の感があったが、今回のプレゼンテーションを見る限り状況はかなり改善されている。JOCV の存在に依存するのではなく、今後の持続性を考えて活動する必要がある。
- (4) 団長より、現在シャーガス病対策において構築している体制は、他の感染症対策においても有益に働く。コミュニティを巻き込むことは重要。フェーズ1は2002年3月に終了するが、今後も継続して技術支援を実施する。
- (5) フティアパ保健管区長より、仕事に対する意欲を重視している。限られた状況のなかでできる限りの努力をしたい。今般の訪問がプロジェクトにとり良い刺激になるとよい。

2 スチタン小学校訪問

- (1) 小学校長から同小学校において教育過程にシャーガス病に関する知識の習得を組み込んでいる旨説明あり。その後関係者の挨拶。
- (2) 小学生によるシャーガス病に関する簡単な劇。
- (3) 授業見学 (塗り絵)

3 薬剤噴霧作業見学

- (1) 作業員によるベクター検出。
- (2) 薬剤噴霧に係る説明（荷物を外に出す。生き物を家の外に出す。薬剤噴霧の効果の説明。今後気をつけなければならない点等の説明)
- (3) 薬剤噴霧。